

学校図書館活用研究

研究テーマ

各教科等の授業で計画的、継続的に学校図書館を利活用するための学習活動の工夫
— 授業における新聞活用の充実 —



1 はじめに

「下野市学校教育計画」 2 「豊かな心」を育む教育の推進（2）読書活動の推進 より

努力目標	努力点
① 学校図書館の活用を図る。	ア 学校図書館教育主任等を中心に全職員が協力して、児童生徒が自主的に読書ができる環境の整備に努める。 イ 図書支援員と連携し、授業やその他の場面における学習活動を通して計画的、継続的に学校図書館を利活用する。 ウ 「下野市新聞の日」での新聞活用をはじめ、様々な活字媒体に慣れ親しむ機会を確保する。 エ 市の図書館との連携・協力を密にする。
② 読書の習慣化を図る。	ア 学校での一斉読書活動の時間等を定期的に設ける。 イ 図書の紹介やビブリオバトルなど、児童生徒の自主的、自発的な読書活動の充実に努める。 ウ 家族で読んだ本について話し合ったり、好きな本を紹介し合ったりする「家読（うちどく）」を奨励する。

学校図書館活用研究会では、平成28年度から令和元年度までの4年間、「市立図書館と連携した活動の工夫」や「子どもが自主的・自発的に取り組む読書活動の工夫」をテーマに取り組んできた。その結果、市立図書館との連携が進み、市立図書館の蔵書を利用したブックトークや読み聞かせを通して児童生徒が良書に触れる機会や、委員会の児童生徒が図書館職員から助言を受ける場が増え、児童生徒が主体となった読書活動の実践が見られるようになった。

一方で、様々な文字媒体に慣れ親しむことができる児童生徒と文字を読むこと自体に抵抗がある児童生徒と二極化が見られること、調べ学習の手段がインターネットの活用に偏っていることなどの課題も見られた。また、ここ数年の全国学習・学力状況調査等の質問紙結果では、児童生徒の半数以上が「新聞をほとんど読んでいない」と回答するなど、児童生徒の新聞離れの実態が浮き彫りになった。

これらの状況を踏まえ、令和2年度は研究内容を「新聞を活用した学習活動の工夫」とし、授業や家庭学習で活用できるワークシートについて研究を進めた。これを受け、令和3年度はワークシートの活用を推進するとともに、授業における新聞活用の充実に努めるための研究を進めることにした。

2 研究内容

- (1) 各教科等における新聞活用の研究（小学校）
- (2) 国語科授業における新聞活用の研究(中学校)

3 研究の実践

- (1) 各教科等における新聞活用の研究（小学校）

「新聞の日」における実践のほか、新聞を活用することで学習効果が期待できる単元についても研究を進めた。活用できる単元が一目で分かるよう、各校で使用しているカリキュラムマネジメントシートを利用し、一覧に示した（令和3年度は小学校4、5、6年生について作成）。

【作成したシートの一例】

新聞活用単元一覧【小学校4年生】

活用が考えられる単元・題材

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
国語	●こんなどころが同じだね ●春のうた 草野心平 ●場面と場面をつなげて、考えたことを話そう 白いぼうし ●本は友達 図書館の達人になろう ●漢字の組み立て ●漢字辞書の使い方 ●葉の楽しみ ●聞き取りメモのくふう ●【コラム】話し方や聞き方から伝わること											
社会	●わたしたちの県 導入 日本地図を広げて 県の広がり											
算数	●学びのとびら ●1億より大きい数を調べよう 大きい数のくみ 10倍した数、1/10にした数 かけ算 ●グラフや表を使って調べよう 折れ線グラフ											

教科書のほか、補助教材として新聞を活用することで、学習効果が上がることが期待できる単元、題材について研究を進めた。国語科だけでなく、できるだけ多くの教科で新聞を活用できるよう、新聞の幅広い活用方法について研究員間で協議し、検討してきた。

シートは、WinBird文書フォルダからダウンロード可
 文書フォルダ>教育委員会>100教育研究所
 >「下野市新聞の日」

(2) 国語科授業における新聞活用の研究(中学校)

新学習指導要領における指導事項を実施するにあたり、国語科の授業において新聞活用の効果が期待される単元を設定し、指導方法について研究を進めた。

実践1 第1学年 「読むこと」領域における指導方法の工夫

1 指導事項

〔知識及び技能〕 (2) 情報の扱い方に関する事項 イ

比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。

〔思考力・判断力・表現力等〕 C読むこと ア

文章の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などについて叙述を基に捉え、要旨を把握すること。

2 実践のねらい

本実践では、情報の取り扱い方やメディア・リテラシーについて生徒たちに学習させるために、情報媒体の一つである新聞を取り上げることを提案している。

情報社会と呼ばれる現代では、情報を正しく読み取る理解力を身に付けるだけでなく、情報発信者の意図・思惑を推論する力を高めることも求められている。私たちの身の回りは、新聞、ラジオ、TV、インターネットなど、様々なジャンルの情報媒体が溢れている。離れている相手ともコミュニケーションをとることができたり、世界各地の出来事を素早く知ることができたり、個人の考えを社会に発信しやすくなったりするなど、情報媒体の発達によって現代人は多くの利益を享受している。しかし、これらの情報媒体から得られる膨大な量の情報の中には、考え方に偏りがあるものや、利益のために事実がゆがめられているものもある。新聞の活用を通して、情報の奥にいる発信者の存在に気づき、正しく情報を取り扱うことができるよう、提示資料等、指導方法を工夫していく。

3 授業の実際

授業では、下野新聞と朝日新聞の「COP26閉幕」についての記事を取り上げた。両新聞の見出しや本文、用いられている写真を比較させ、読者が受ける印象にどのような違いがあるかを考えさせた。また、各自が考えたことをグループで協議する場を設定した。

今回は、新聞の構成要素のうち「主見出し」「袖見出し」「前文(リード)」「写真」の4つを取り上げ、比較させた。当初は「本文」まで取り上げる予定であったが、記事の難易度の高さを考慮し、授業では省略した。実際の授業では、「主見出し」「写真」について考えることはできたものの、「袖見出し」「前文(リード)」まで進むことはできなかった。「主見出し」はそれぞれ十字程度で短かったため、取り上げられた単語とそうでない単語を比べやすかった。1単位時間で「前文(リード)」の比較まで進めなかったことを考えると、「本文」の比較を行うのは2年生・3年生になってからが妥当であると考えられる。

見出しの違いからは、「下野新聞からは、会議で採決されたことを評価する印象を受ける」「朝日新聞からは、あまり評価していない印象を受ける」ということが挙げられた。用いられている写真の違いからは、「下野新聞からは、参加国同士でよく話し合いをしたことが伝わってくる」「朝日新聞からは、これからの各国の動きに注目させたい気持ちが伝わってくる」ということが挙げられた。



実践2

第3学年「聞くこと・話すこと」領域における指導方法の工夫

1 指導事項

〔知識及び技能〕 (2) 情報の扱い方に関する事項 ア

具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めること。

〔思考力・判断力・表現力等〕 A話すこと・聞くこと エ

話の展開を予測しながら聞き、聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分の考えを広げたり深めたりすること。

2 実践のねらい

本実践では、多様な情報が溢れる中での「新聞を読むこと」の価値や「情報を多面的に見ること」の価値を実感させるために新聞を活用した授業実践を提案している。

「読売中高生新聞」は、中高生が興味を持ちやすい視点、紙面構成であり、生徒も短時間で自分たちの興味のある情報を手にすることができる。また、その情報をきっかけに学びを深めている生徒も見られるなど。生徒が新聞の魅力を実感するために適した教材である。

また、異なる視点から対話や議論を重ねていけるよう、グループや学級全体での協議の場を設定していく。また、授業終盤には、読売新聞社の支局長にゲストティーチャーとして授業に参加していただき、情報の発信者の「思い」や、情報の受け手が身に付けておきたいメディアリテラシー、さらには新聞を読むことの価値について考えを深められるよう、関係者から直接話を聴くことができる場を設定した。



3 授業の実際

授業では、東京オリンピックが見開き一面にダイジェストで収められた紙面を基に、「印象に残った記事」を紹介し、なぜ自分はその記事が印象に残ったのかを考えさせた。その後、他者の考えを気分の考えと比較しながら聞くことを通して自分自身の考えをより明確にできるよう、グループ内で自分の感想を語り合う場を設けた。グループでの協議後は、情報のもつ多面性に気付くことができるよう全体発表の場を設定した。



感想の交流を通して、同じ記事を見ていても自分とは異なる視点で記事を見ていることに気付いたり、印象に残った理由を語り合うことで級友が大切にしている価値観や視点に新たに気付いたりすることができた。全体発表でも、級友の異なる視点から対話や議論を重ねていながら、オリンピックの残した業績を深く見つめることを通して、情報のもつ多面性に気付き、自分自身の考えを形成することができた。さらには、ゲストティーチャーの話を通して、多面的な視点で情報を見ることの価値を実感できた授業となった。ゲストティーチャーからも、生徒が積極的に学び、自分の意見を磨くことの大切さを理解できた授業であったとの評価をいただいた。

授業後も、学級通信等を通して本時の活動を紹介するなど、学びが継続したり、自分たちの学んだことの価値を実感できたりするような指導を心掛けた。



4 成果と課題

(1) 成果

- ・「下野市新聞の日」での新聞配付の機会を利用して実践したことで、研究委員だけではなく、学校全体に研究内容を広げることができた。
- ・新聞を活用できる単元を1枚のシートにまとめたことで、今後、「新聞の日」に提供される新聞を計画的に活用することが期待できる。
- ・国語科の「情報の扱い方に関する事項」を扱う単元では、教材に新聞を活用することでより多面的な情報を扱うことができ、学習効果が高まった。
- ・地方紙と全国紙を比較したり、記事の感想を友達の感想と比較しながら話し合ったりするなど活動内容を工夫することで、新聞の教材としての活用価値を高めることができ、学習効果の向上につながった。

(2) 課題

- ・新聞を活用することが目的にならないよう、学習指導要領における指導事項の位置付けを意識して授業づくりを進めることが重要である。
- ・当日の新聞を授業で用いる場合、時間の制約があり教材研究の時間を確保することが難しいため、情報の新鮮さにこだわらず、時間を掛けて吟味・選択することが大切である。
- ・紙面を構成している要素を「主見出し」「前文」「写真」のように細分化し、それぞれの長所・短所を見極めておくなど、新聞がもつ特性について教師がより理解を深めることが必要である。
- ・新聞活用一覧について、今回扱わなかった学年について作成したり、一覧に示した単元での実践について具体例を示したりできるよう、研究を継続できるとよい。

